

ドイツ・バイエルン州の 森を歩く

佐々木史郎
民博民族社会研究部

ドイツ南部に広がるバイエルン州は南にアルプスを控え、山と森と湖に恵まれた風光明媚な観光地が多い。また、かつてはバイエルン王国という独立国であり、ノイシュヴァンシュタイン城をはじめ王国ゆかりの歴史遺産も多数ある。バイエルンの美しい森は州の観光資源であるとともに、木材生産の場でもあり、野生動物の宝庫でもある。今ドイツの森でも、木々の育成と野生動物の保護、そして観光振興の三者をいかに共存させるかが問題となっている



狩猟官の仕事

わたしがドイツの森林問題に接する機会をえたのは、二〇〇八年一月である。ミュンヘン工科大学の狩猟と森林管理を専門とするマルクス・シャラー博士と、彼の友人で狩猟官のマックス・ケラー氏と知己をえたからである。狩猟官とは日本では聞き慣れない職業だが、特別な訓練をへて資格をえたプロの猟師で、森のなかの野生動物の管理や有害鳥獣の駆除、密猟の取り締まり、アマチュア猟師のガイド等の活動をおこなう。バイエルン州には州有林が多く、森の資源は州の貴重な収入源でもある。野生の鳥獣も当然活用すべき森林資源であり、狩猟は森での生産活動の重要な部門であることから、それを管轄する専門の官職を設けているのである。

集団追い込み猟

ケラー氏がまず案内してくれたのは、彼が所属するオーバーアマガウの営林署が主催する秋の有害獣狩猟だった。場所は観光地で有名なガルミッシュ=パルテンキルヘン近郊で、狩猟対象はノロジカのメスとアカシカである。ノロジカの場合は繁殖を抑え、食害を予防することが目的なのでこの時期の狩猟対象はメスである。この狩猟は集団追い込み猟だった。まず、複数の猟師が猟場となる山の斜面に配置される。猟師たちは配置された場所から動けないが、その代わりに彼らが連れてきた猟犬が藪のなかを走り回って獲物を探し出し、猟師がいるところまで追い立ててくれる。猟師は追い立てられた獲物が目の前にあらわれたところを撃つ。この日の猟では一九人の猟師が参加して、午前九時から一時まで二時間活動して、ノロジカ一頭とアカシカ一頭というのが成果だった。

人工の塩場

狩の翌日、ケラー氏は彼が管理する森を案内してくれた。ドイツ最高峰のツークシュピッツの麓に広がる美しい森である。彼がまず見せてくれたのは、所々の空き地にある人工の塩場だった。空き地のなかに塩の塊が置かれていて、一〇〇メートルほど離れたところに櫓が組まれている。そこから塩場に来たシカを観察するのである。猟期にはそこから動物をねらうこともできる。わたしはロシア極東で先住民族が作った塩場とその近くの樹上に設置された待ち伏せ用の台を見たことがある。このような狩猟方法はロシア人がヨーロッパからもち込んだものといわれていたが、ドイツでその本当の姿を見たような気がした。

冬の禁猟区

さらにアカシカの冬期のえさ場を案内された。今バイエルンの森でもシカ類による木の食害が深刻である。冬のえさが少ない時期に多くのシカが樹皮や新芽をかじって木を枯らしてしまうのである。それを防ぐために、ケラー氏は森の一部を柵で仕切り、晩秋にシカをそのなかに追い込んで、翌春までそのなかでクリやドングリ、リンゴの絞りかすを与えて越冬させているのである。そのえさ場と周辺地域は禁猟区となる。彼によれば、冬の食害を防ぎ、シカもえさに困らないという一石二鳥の方策ということだったが、当然批判もある。森林業者からは害獣をせっかく集めるのだから一網打尽にして駆除すべきだという声があり、動物保護団体や狩猟団体からは、どうせ夏に森に放つて狩猟対象とするのだから、えさをやって越冬させるのは偽善だという声もある。

密猟の取り締まり

そのほか森林伐採と植林の現場も案内してもらった。また、ケラー氏が自分の森でもっとも気に入っている場所として、ツークシュピッツを仰ぎ見ることが出来る美しい湖も見せてくれた。彼自身この森を非常に気に入っていて、一日の大半を森のなかで過ごしている。それだけに自分の家の庭のように、森のなかを知り尽くしている。しかし、狩猟官の仕事には危険も伴う。特に密猟の取り締まりは、相手も武器を所持していることから、命がけである。野生動物資源と木材資源、そして観光資源の三者をいかにすべて共存させつつ持続的に利用するのか。美しい南ドイツの森で、狩猟官はこの問題に頭を悩ませつつも、今も懸命にパトロールを続けている。



ドイツの最高峰ツークシュピッツの麓に広がるマックス・ケラー氏が管理する森



塩の塊を置いてシカをおびき寄せる人工の塩場



捕獲したノロジカを検分するマルクス・シャラー博士



シカのえさ場 (フィーディング・ステーション)



ノロジカとアカシカの猟場